舳　倉　島　の　蝶　類

大　野　正　男
埼玉県入間郡鶴ヶ島町脚折 224

Butterflies from Hegura Island, Ishikawa Prefecture, Japan

Masao Ohno

舳倉島は行政上，石川県輪島市に属し，日本海に強く突出した能登半島の，更に沖合約 50 km の海上に浮ぶ，周囲 4 km ばかりの小島嶼である．しかし最高地点でさえ 15 m に満たない平坦な島であるため，日本海中に独特の位置を占めながら生物地理学的にもあまり注目されたことなく，従ってまた，この島の生物相に関しては未知な点が少なくなかった．蝶類に関しては岩田 (1952) によるヒメアカタテハの記録と，近年金沢大学・北国新聞調査団の採集した資料に基いて記録されたモンキチョウとヤマトシジミとの合計 3 種の記録があるにすぎない．

筆者は 1968 年 7 月，この島を訪れ，21～22 日の 2 日間にわたって島内全域を歩き，甲虫，クモなどを中心に陸棲動物相の調査を行ない，その際，蝶類についてもできるだけ注意をした結果，この島の蝶相の概略を把握することができたので，ここにそのあらましを報告しておくことにする．

I．舳倉島産蝶類目録

1. *Pieris rapae crucivora* Boisduval モンシロチョウ (1 ex., 21. VII).
2. *Colias erate poligraphus* Motschulsky モンキチョウ (1 ex., 21. VII).
3. *Zizeeria maha argia* Ménétriès ヤマトシジミ (1 ex., 21. VII).
4. *Poligonia c-aureum* Linnaeus キタテハ (2 exs., 21. VII).
5. *Vanessa cardui* Linnaeus ヒメアカタテハ (1 ex., 21. VII).
6. *Vanessa indica* Herbst アカタテハ (1 ex., 目撃, 22. VII).

II．考　　察

在島中，分布が確認できた蝶類は，目撃種 1 種を含めて上記の 6 種だけで，この島の蝶相は極めて貧相のように見受けられた．その理由としてはいろいろ挙げられようが，最も大きな影響を与えているのは，この島には人為的に植栽された樹種があるだけで，マサキ，マルバアキグミなどの灌木以外，在来の樹種が全く見られず，島の大部分がススキを優占種とする草原によっておおわれている点にあると考えることができる．恐らく今後徹底した調査が試みられようとも，本報に記録した蝶以外には，新たな追加種はあまり期待できないであろう．

舳倉島において個体数が最も多いのはキタテハであったが，これは，その食草であるカナムグラが小学校・灯台を中心とした地域にかなり多く自生しているためと思われる．キタテハに次いではモンキチョウが多かったが，これもその食草であるカワラケツメイ，ミヤコグサ（在来植物）が少なくなく，その上近年植栽されたニセアカシアなどもよく生育しているので，食草条件が充分満たされているためと考えられる．モンシロチョウは家庭菜園的小規標な圃場（主として漁業に依存しているので耕地は少ない）の周辺では多少みられたが，あまり一般的でなく，スジグロチョウは全く棲息しないようであった．アカタテハは最も少なく，島の東北端で 1 頭目撃しただけであった．

島の食草環境[1] から考えると，アゲハチョウ科をはじめ，この島に定着できそうにない種類が多数挙げられるが，

1) 舳倉島からは丹 (1956)，吉川 (1935)，正宗他 (1961) などにより栽培植物を含めて 270 余種の植物が記録されているが，戦時中から戦後にかけて島の中央部が一時開墾されたためか，絶滅したと考えられる種類も少なくない．

イチモンジセセリ，ルリタテハ，ジャノメチョウ，ヒメウラナミジャノメ，ベニシジミなどのごとく，食草条件が充分満たされているものでも全く姿をみかけ得なかったものがある．これらが実際分布していないとすれば，その原因を知ることも興味深い課題となろう．

IV. 附　記（舳倉島のドクガ）

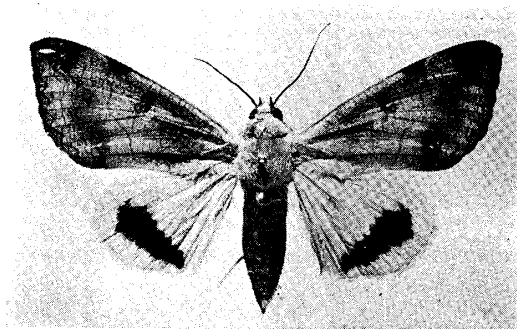
在島中，灯台の職員の方から数頭の蛾をもらい受けたが，その蛾は正しくドクガ *Euproctis subflava* BREMER であった．聞くところによると，数は少ないながら最近灯台に飛来し，職員の方達に被害が続出している由である．離島間際にこの話を聞いたため，発生源などについて特に調査は行ない得なかったが，イタドリ，マサキなどかなりあり（特にイタドリの群落は大きい），その上，植栽されたクロマツが近年かなり大きく生長し，林を形成しはじめ，その林縁に食樹の生育に適した環境をつくりだしつつあるので，今のところ，まだ被害は一般的ではないらしいが，あるいは次第に発生量が増加し，将来この島のドクガが問題になることがあるかもしれない．

文　献

岩田陽一 (1952) 舳倉島の蝶類，昆虫の科学，1 (1)，p. 2.
金沢大・北新自然科学調査団 (1961) 舳倉島・七ツ島，pp. 1〜151 (ref. p. 90) (北国新聞社).
丹 信実 (1956) 京都府冠島の生物，平安教研々究論集，1，pp. 1〜113，5 pls.
吉川純幹 (1935) 奥能登の植物，pp. 1〜68.
小田豊作・吉川純幹 (1930) 舳倉島の自然（本書は直接参照できなかった）.

青森県でクロモンシタバを採集

佐　藤　　博
青森市橋本3丁目 6-4

友人の採集した蛾の三角紙標本を整理したところ，1967年9月28日，青森県十和田国立公園内の酸カ湯 (Sukayu) 温泉で採集したクロモンタシバ *Ophiusa tirhaca* CRAMER を発見した．個体は写真に示したように新鮮である．東北地方での記録は初めてであろうと思う．標本は筆者所蔵．

青森県十和田国立公園酸カ湯でとれたクロモンシタバ

モーニッケの書いた昆虫論文

磐　瀬　太　郎
東京都港区高輪2-1 伊皿子アパート 505号

本誌19巻3/4号に紹介した日本通の蘭医 OTTO MOHNIKE が，鱗翅類に関する論文を残しているかどうか，まだ判明しないが，「ニューギニア昆虫学文献目録」[1]（昆虫36巻413頁書評参照）によると，少くとも甲虫関係の記事が2篇あり，1871年にはベルリンの自然科学アルヒーフ 37巻に，スンダ・モルッカ諸島のコガネムシ科の新種22を書き，1874年にはボンの下ライン博物学医学協会の会報（医学の部）に，コガネムシ科の若干の新種と稀種について説明したことの記事がのっている．

1) GRESSITT and SZENT-IVANY, Bibliography of New Guinea Entomology, 1968 は，鱗翅目研究者にとっても，貴重な出版物である（昆虫36巻413頁，1968，書評参照）.